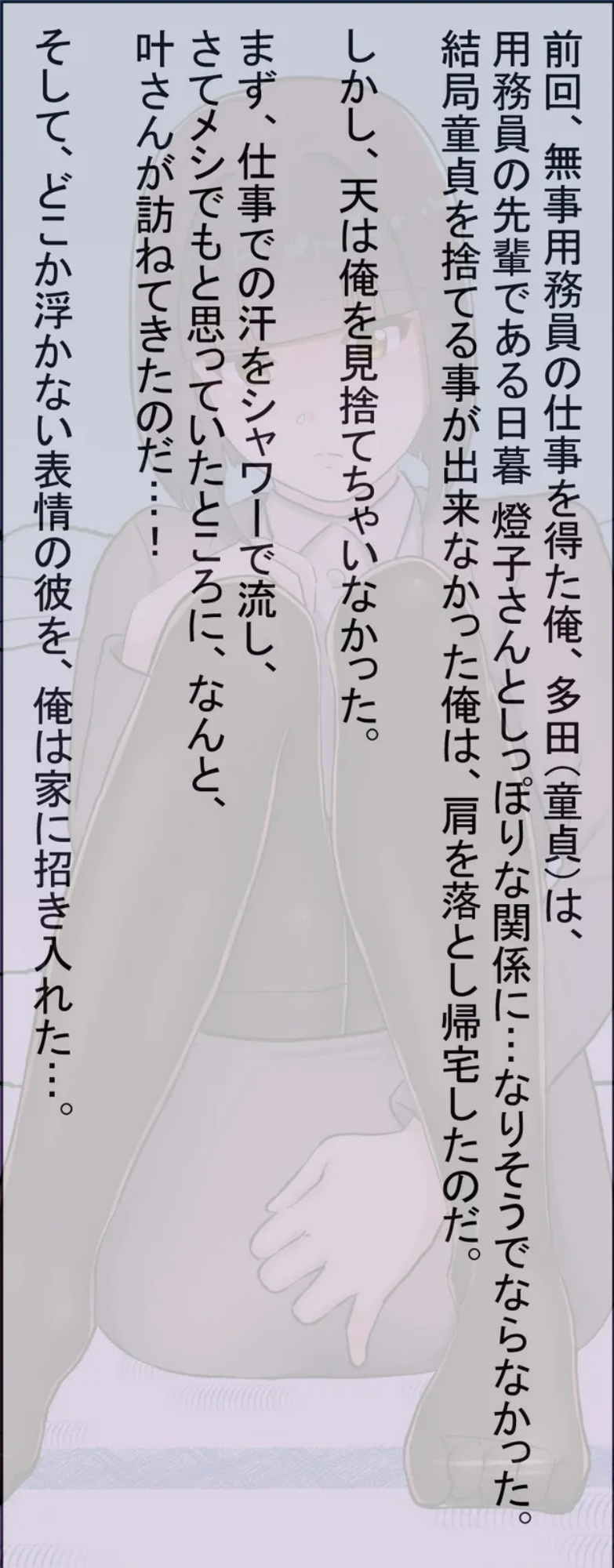






前回、無事用務員の仕事を得た俺、多田（童貞）は、
用務員の先輩である日暮燈子さんとしっぽりな関係に…なりそうではなかった。
結局童貞を捨てる事が出来なかった俺は、肩を落とし帰宅したのだ。

しかし、天は俺を見捨てちゃいなかった。

まず、仕事での汗をシャワーで流し、
さてメシでもと思っていたところに、なんと、
叶さんが訪ねてきたのだ…！

そして、どこか浮かない表情の彼を、俺は家に招き入れた…。

「あの…叶さん…今日はこういったご用件で…」

「…」

「あ、ああ！もしかして今日の仕事の事ですか!？」

「でしたら安心してください！俺、頑張れそうですから…!」

「…」

「…か、叶さん…?」

叶さんは困ったような表情をするばかりで、口を開こうとしなかったが、

「あの…」

「はい!」

「…ぱ、ぱんつを…」

「へ?」

「僕のパンツ…拾いませんでしたか…?」

「!」

俺はピンときた。そう、初めて会った時、彼の忘れ物パンティーを、俺はくすねていた。そして気付いた。叶さんがずっと、自分の股間を気にしている事に…。まさか…。

「ぱ、パンツは知りません(大嘘)が、もしかして叶さん、今…ノーパンですか…?」

「そ、そんなわけないじゃないですか!」

「じゃあ確認してもいいですか…?」



「は、はいてますよ…」

「いや、はいてないじゃないですか…」

「…」

「…叶さんって…、見た目に似合わず結構変態だったんですね…」

「……っ」

「…み、見せに来てくれたんじゃないんですか…?」

「は…はい?」

「その…、だって…、わ、わかりませんが、こんな簡単に服脱いじやうとか…、ちよっともう、そういうつもりだとは思えませんし…」
叶さんは悔しそうに震えている。

「…そ、そうですよ!」

「!」

「あの日っ! パンツ失くしちゃって、一日タイツ直穿きしてたら…」

「き、気持ち良くて…!! この感触にハマってしまったんです!!」

「どうしてくれるんですか! 多田さんのせいですよ!」

「えっ、え、俺…?!」



「そうですよ！多田さんが服全部脱がせるから！
しかも変なことも言ってくるし、僕…僕…」
「…す、すいませんでした…」
「というか叶さん、ボクッ子だったんですね…」
「うるさいな！今関係あります?!それ」
「あ、いや…」

関係あった。

前回会った時はかなり他人行儀で、
一人称が『私』だった人が、取り乱して自分を僕と言う姿に、
俺は勃起した。

「買った物とかもあの後、そのまま行ったし、
実は今日もずっとノーパンだったんです!!パンツ返してください!!」

「いや…俺は叶さんのパンツは知らな…」

「嘘つかないでください!!絶対持って帰ったでしょ!!」

「(うわこの人、全裸でしかもどんどん勃起させていきながら怒ってる…)」



「叶さん…めっちゃ勃起してますけど、ソレどうするつもりなんですか…？」
「え…あ…」
自分でも意識できていなかったようだ。
しかしもう今更、恥じらいは無いだろう…、
尻の穴まで丸見えになっている…。



そしてムクムクと完勃ちしてしまった。

「はは、完勃ちじゃないですか…、オナニー、シていきます…？
それとも、俺、手伝ってもいいですか…？」

「うう…」

「あ、でも、叶さん、タイツゴシが好きなんでしたっけ…、
穿いてくださいよ。俺、叶さんの好きな事してあげたいっす…」



「う、うわ、すごいっすね…、叶さんのちんぽ…、
タイツ押し上げてキツそう…。」

尿道にタイツが張り付いちゃってますけど、

これ射精できるんですか…？」

「…、これは…無理かも…」

「ですよ…wなんか無理そうですもん…。」

「じゃあ、出したくなったら言ってくださいね…♡」

「うん…」

うう、あの叶さんが、俺に股広げて求めてきてる…。

ツンツンしてた叶さんが…今は俺を…。

燈子さん、ありがとうございます、俺、あなたのフェラを

思い出して、叶さんを気持ちよくさせてみます…!!

んぎゅんぎゅん

ピク

ピク

「はあ、…叶さん…匂いが…、
叶さんの匂いがします…、一日中直穿きしたタイツの匂い…」
「ちよっ…!! なにして…、変な事しないでくださいよ!」

「す、すいません……つい興奮して匂いのリポートを……」

「だから！変なこと言わないで！！」

大変だ、全然臭くない。

ちんぽにハンドクリームでも塗っているんじゃないかってくらい、フローラルの香りがする…。

…ん、でもよく嗅ぐとその奥に汗と尿と…

「多田さん!!」

「…あっ！」

「ぺろぺろ」

「多田さん…っ！」

タイトツの味だ…おちんちんの硬さくらいしかわからないが、
叶さんはすごく興奮しているようで、ビクビクとおちんちんが震えている。

「叶さん…！裏筋、気持ちイイですか…!?」

「き、きもちいい…っ！」

「叶さん…！叶さんっ！」



「多田さん…、あ、もう、そこばっかり…」

「はは…」「…、一番匂いがきつくて…」

「…え…っ」

「一日穿いてたんでしょ…？ほら…だから…、多分、ちやうど『ヨ』がおちんちんの先っちょ…」
「やあもっっ!!」

「先っちょ舐めてほしいですか？」

「…うん…」

「…聞きたいです…叶さんのお願い…」

「…うう…、ぼ、ぼくのおちんちんの…さきっぽ…お願いします…」

「お願いします…？何を？」

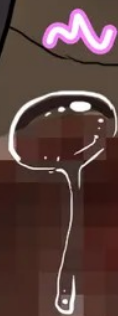
「…な、舐めて…ください…ぼくの…さきっぽ…」



「わ、わわ、わかりました……！
叶さんのさきつぽ、たくさん舐めてあげます！」
「ひゃっ」

俺は最高潮に興奮して、思い切りタイツに噛みついてしまった。

ビクッ
ビクッ



タイツが破けて、一番負荷のかかっていた先っぽから裂けて、
ギンギンになった叶さんのチンポが飛び出してきた。

「あ…わ…、叶さんの勃起したおちんちんが…目の前に…!!!」
「うう…」



「ひあっ！」

俺は、燈子さんがしてくれたフェアを思い出して、

叶さんの声など聞こえはしなかった。

口の中いっぱいに叶さんの我慢汁が溢れてきた。

「ひんっ……!!♡」

の、喉の奥にねっとり纏わりつくコレは……!

とろけ とろけ
ぐわ んどろり
とろけ

「ひんっ……!!♡」

の、喉の奥にねっとり纏わりつくコレは……!

[illegible]

「は、離してって…言ったのに…」
「…あ、はあ…すいません…」
叶さんのザーメン、叶さんのザーメン……。

ドパッ

ゴウ

ゴウ



「か、叶さん…、いいんですよね…？後から怒りませんよね…？」
「お、怒るわけじゃないじゃないですか…。僕だって…それくらい…」
「あの、俺、初めてなので…」
「…ローション…ありますか…？」
「はい！（オナ用の…）」
「僕の…お尻の穴に…」

「ゆ、ゆつくり…お尻の穴…指で…」
「は、はい…」



う、うわ…ちょっと指を、あてがっただけで…
どんどん勝手に…引きずりこまれて…
「か、叶さん…、痛くないですか!」
「…大丈夫です…」



「あ…っ、あ…」

「（あ…、なんか…どんどん盛り上がってくる所がある…!）」

「あっ！あ！」

「ココが前立腺という所なのだろう、明らかに反応が変わって、腰を動かし自分からソコに、指が当たるようカクカクと揺れ始めた。」

「叶さん、ココ、気持ちいいんですか？」

「う、あ…!」

「「フク？」の「フクリ？」」

指にちからを入れて強く擦り上げてみた。

「きゃあ!!」



「あーあーあああつ!!❤️」

お尻の穴がきゅつと締まり、続いて痙攣をしたかと思うと、
叶さんのおちんちんからはまた精液がトロトロ流れ出していた。



「叶さん、いいんですか…?」
もう二回もイってで、辛くないですか…?」

「う…、だ、大丈夫ですから…早く…
(三回もイかせてもらって、満足した
から終わりなんて、出来るわけない
じゃないか…)」
「わ、わかりました…!では!!
よろしくお願いします!!」
俺は遂に童貞を卒業する…!!

「あ、あれ…す、すいませ…
俺、ほんと初めてで…！
「うわ、滑って中々入らない…！」

「え…いや…あの、落ち着いて…。
（ん…？おかしいな…なんかすごく、
大きいような…）」

どこをどう触ったらいいかもわからず、
とりあえず叶さんのおちんちんと
乳首を触りながら、小さな穴と格闘
した…。

「あ！は、入りそうです！
さっきっぽちよっと入りました！」

「あ……わ、多田さん……!?
ちよっと……まっ……て……、
（いやいやいやいや!! 待って今さっきぽ!!
で、このサイズなの……!?!）」
「このまま……奥まで……入れますね……!」
「た、多田さ……っ、ま、まっ……て……!」

「わ！」



「……うっつ!!!」
「か、叶さん……俺のちんぽ、
全部……入りました……っ!!!」
「あ……ああ……多田……さん……」
「動きます!」
「だ、だめ、ちょっと待って……!!!」

「待ってってばあ!!」
「すいません!!無理ですっ…!!」

以外にもキツイのは入り口だけで、
中に入ってみるとフワフワな感じ
だった。
さつき叶さんが気持ちイイと言って
いた前立腺を探そうと思ったのだが、
なんかもうよくわからなかった。
とにかく俺は脱童貞したのだった…。

「うっっ!! 叶さん!!」

ドンッ ドンッ

ビッ
ビッ

セッ

フッ
フッ

「ああっ」

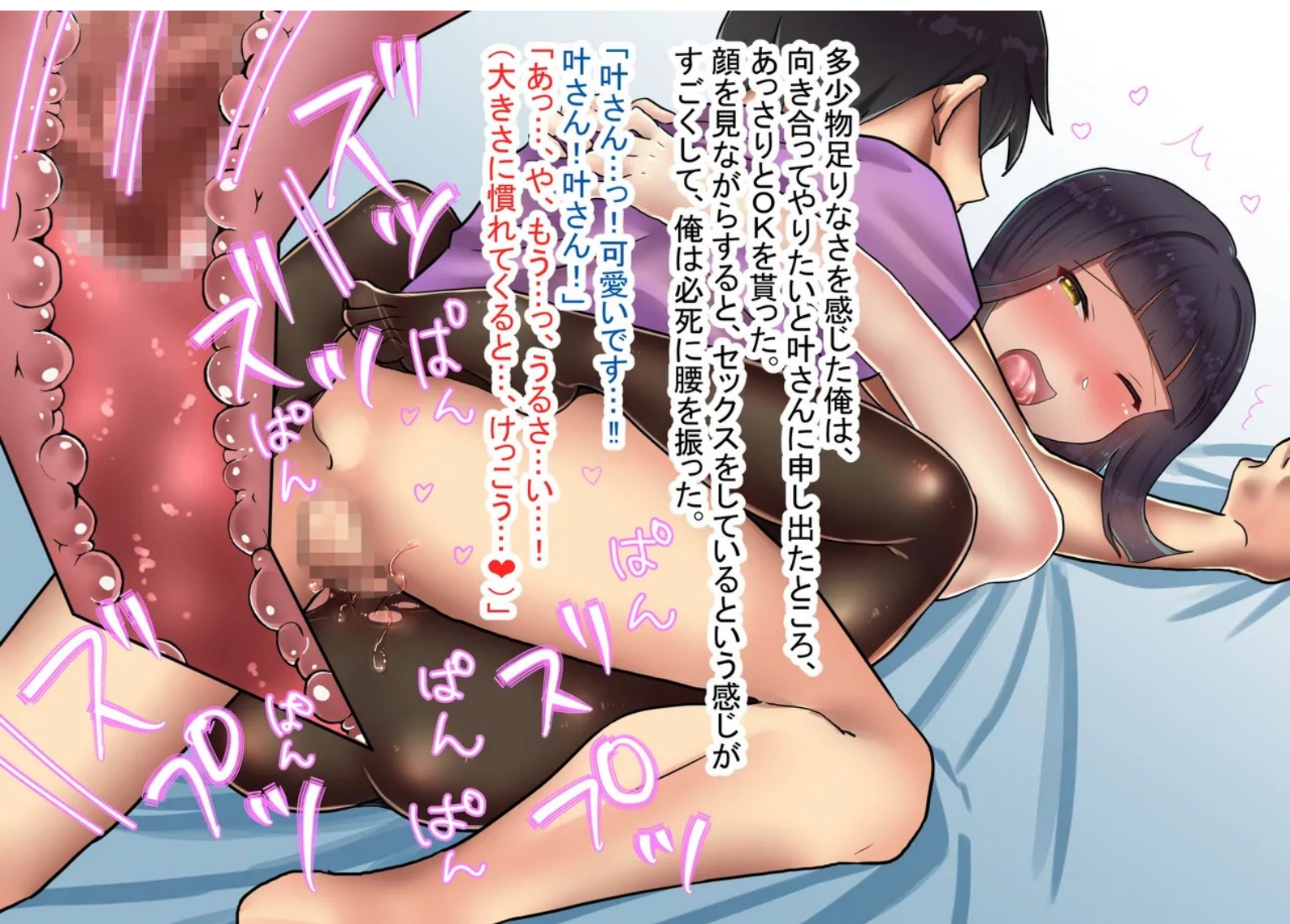
俺は大分早かったが、叶さんも
すぐに射精していた。



そしてこの日の俺はすごかった。
「(ぜ、全然止まらない…!)」

「(えっ…!! まだ出てる!!)」





多少物足りなさを感じた俺は、
向き合ってやりたいと叶さんに申し出たところ、
あっさりとOKを貰った。
顔を見ながらすると、セックスをしているという感じが
すごくして、俺は必死に腰を振った。

「叶さん…っ！可愛いです…!!」

「叶さん！叶さん！」

「あっ…、や、もう…っ、うるさい…!!」

（大きさに慣れてくると…、けっ…う…♡）



俺は自分のチンポがメキメキと大きくなって
いくのがわかった。
「叶さん！叶さん！！」
「あ……あああ！！」

／＼やさっ
／＼やさっ





俺はかつてないほどの射精をした。
叶さんの顔を見ているだけで、
次から次へと精液が飛び出してくる…。

「うっ…!! (また、ずっと出てる…!!)」



叶さんはこの後、俺んちの風呂に入った。
俺はその間考えた。俺は叶さんが好きだ。付き合いたい!!

そして、風呂上りの叶さんに告って…、それから、
パンツを返した。

叶さんは少し驚いていたが、返されたパンツをぎゅっと握りしめ、
小さく頷いた。

可愛い…、彼女…ではなく彼氏…だが、付き合うとはこういう事
なのか、と、俺は舞い上がった。

だが、今思うと、舞い上がりすぎたのかもしれない…。
俺は何しろ、ニートで童貞で、だから、付き合った後の事なんて、
考えた事がなかったのだ…。

つつく。

































































































































































































































